

〔書評〕

高松政雄著

『日本漢字音概論』

この書は昭和五十七年刊行になる「日本漢字音の研究」(風間書房)に続く、高松政雄氏の第二著である。前書との関わりを内容の面からおおまかに位置づけるなら、前書の基盤となつてゐる氏の日本漢字音観をあらわしたものと云うことが出来るであらう。

本書序の冒頭は次のような一文から始まる。

我が国における漢字の、その音(日本漢字音 Sino-Japanese)に就きての研究は、近時、それまで長らく支配的であつた所謂韻鏡至上主義の呪縛とも言つべきものより蟬蛻して、現実的帰納主義へと、いわば Copernicus 的転回をなしつつあるのである。(中略)ところで、その現実主義に立脚する時、先ず以て必須なるは、本家本元の中国語音に関する諸知識である。

高松氏はこのような認識のもとで、さらに

言語は文化である。就中に漢字音を摂取する等は、我が国にとつて、文化的には極めたる一大勝事であるはずである、(中略)因りて、須らく、これ(日本漢字音)は本来的なるところに戻つて、先ずは大局的に、文化の流れ全体の中において見て、その本質は看破さるべきである

と述べ、そして、その「文化の流れ全体の中に」「身を浸して後に、

湯 沢 質 幸

さて我が国字音の内部検証は始まり得る」と云う。(※二重かつこ内は湯沢。以下同じ。)

高松氏の本書執筆への意欲がひしひしと感じられる。率直なところ、満田新造氏名付ける「韻鏡至上主義」からの「蟬蛻」の時期、また「本質」の解釈などにつき、私には著者を十分理解してゐるという自信がないが、その基本的な姿勢において、今日氏に対し特に異議を唱える人はいないと見てよいであらう。

本書本論は右のような立場から、当然の帰結として「中国語音に関する諸知識」すなわち中国語音そして中国語音韻学の概説をもつて始まる。本論の具体的な内容に入るのに先立ち、目次に従つて本書の構成を紹介しておく。

序

- 第一章 中国語学の基本概念 第一節中国語史の時代区分 第二節中国語音韻学 (1)音節構造 (2)声母 (3)韻母 (4)声調 (5)反切 第三節「広韻」 第四節等韻学 第五節古音学
- 第二章 万葉仮名 第一節概観 第二節例外的音形 第三節解釈
- 第三章 漢音 第一節漢音・吳音の名称 その(一) その(二) 第二節漢音の音形 (1)概観 (2)声母 (3)韻母

第四章 呉音

第五章 中世的唐音 第一節声母 第二節韻母

第六章 近世的唐音 第一節声母 第二節韻母

跋

索引

第一章第一節では先行諸説渉猟のもとで中国語(音韻)史における時代区分について説く。この問題は其の性格からして早々に決着のつくものでないことは明らかである。氏は諸説比較対照の中で王力の区分によるとする。ここでは意図的に時代区分論に入ることが避けられている。すなわち「茲では、一往の拠り所として、最も簡明なる王力説を採用することとし、必要に応じて、他説をも参看するの挙に出でようとする」と言う。(日本漢字音のことを考えるに当たつて王力説採用の利点はなにか。氏が他の論文においても王力説によつてゐるので、日頃氏の論文に恩恵を受けている私などはついそこに興味を覚えてしまうのであるが、おそらく氏は、本書は概論書という点を考慮して区分論に深入りすべきでないと考えたのであろう。あるいは、言語における時代区分の設定はそれ自身を目的とするのではなく、言語の歴史的变化を考える上での便宜をはかつて、一応の枠組みを示すことを目的とする」と見る立場から、深入りを避けたのかも知れない。ともあれ、書き方は淡白ながらこの節での考察は、従来の区分論のありようを知る上で至極好都合である。

第一章ではこの後も引き続き中国語音韻学の概説が、主要な項目を中心として諄々と説かれている。すなわち中国語音韻学の基礎的なことがら、先行諸説の紹介、各事項の相互関係の説明、また時

には日本漢字音(研究)その他への言及等をまじえながら解説されている。そして、その過程では、例えば、第三節「広韻」における、尾崎雄二郎氏の序文読み下し文の掲載、第五節における、万葉仮名を通しての上代語研究を脳裏に置いた「古音学」の説明等にも紙幅が割かれている。読者は第一章を通じて読めば、第二章以下の日本漢字音各論に無理なく入れるような仕組みになつてゐるのである。

総じて、高松氏は、日本漢字音研究に「必須」の(中国語音韻学の領域では常識的であるが日本語研究者の多くにとっては馴染みの薄い)「中国語音に関する諸知識」を、いかにして簡潔かつ理解しやうい形で示すか、という点に心を砕いてゐるように見受けられる。概説を書く場合常に同様の努力が必要とされると言つてしまえば、それで終りである。しかし、氏が跋で触れてゐるように日本漢字音(研究)に視点を据えた「概論としての(先行の)専書は無に等し」の中で、加えて、日本語研究者の圧倒的多数が言語学的に中国語音や日本漢字音にさほど興味をもつてゐるようにも見えない状況の中で、日本漢字音研究を目指す人々を視野に入れつつ、外国語である中国語のその音韻学の概論を試みることは、読み手側の推察以上に苦勞を要することだつたのではないだろうか。考えてみれば、日本漢字音の概論「専書」の、これまで「無に等し」かつた事実それ自体が、まさにそのことを物語つてゐると言えるのかもしれない。

日本漢字音理解のために、中国語音韻学につきながどのくらい盛りこまれるべきか。それは、もとよりその書の分量、想定される読者層などにより揺れる。読み進んで行くと、氏もこの点にかなり苦心したことが伺われる。私はその根本において氏の選択に賛成したい。ただ「韻鏡」に関しては、日本での利用法やその歴史をもう少し

し詳細に述べるべきでなかつたかという感想を持った。日本漢字音の理解と研究を深める上で、韻鏡至上主義を一典型とする、日本の『韻鏡』重視の事実を正確に把握することは必要不可欠である。本書でももちろん『韻鏡』のことはかなり詳しく述べられている(特に六十七頁以降)が、例えば韻鏡至上主義の場合など、具体例付きの説明が若干加えられていれば、読者はその歴史や弊害などを容易に理解できるのではないだろうか。『広韻』と同様『韻鏡』も、一節を設けて論じられてよかつたように思われる。

第二章以降は、論点が日本漢字音に向かう。

第二章では、「万葉仮名」を取り扱う。ここに万葉仮名のことを詳論する独立した一章を設けてあることは、本書の特徴の一つとなっている。すなわち、「万葉仮名」はもともと日本漢字音における述語ではないし、もちろんその音系の一呼称でもないことや、三章から六章までにあつては音系ごとに日本漢字音が論じられているが、従来の日本漢字音論では三章以下で説かれる漢音・呉音・唐音と並べて多く「古音」が取り上げられていることなどを振り返ってみると、本書では特に「古音」の代わりに万葉仮名が取り上げられているかのように見えるのである。いずれにせよ、日本漢字音に関わつてなぜ万葉仮名が詳しく詳論されているのか。その直接的な理由は次の文あたりに伺われる。しかし、跋あたりによると、その根元的な理由は、氏が上代日本語音韻研究を志す人々を視野に入れた、日本漢字音概説書作成を意図した所にあると、換言するなら、漢字音概説書の今日的なあり方の提唱及び実践を行おうとした所にあると捉えることができるようである。

●漢字の、その音(字音)の、我が国における歴史の上での最初の文献は、所謂万葉仮名である。これは、素材としての漢字の、用法としては仮名一音標文字一なるものである。さる性質のものであるが故に、これを我が漢字音史料の先頭に立つものと一まずは見做すのである。(九十三頁)。

●(日本漢字音は)常識的には、所謂呉音・漢音で以て大凡は覆われてしまふものである。(二一九頁)。

第一節の初めの方で、高松氏は「万葉仮名の理解には、所謂上代特殊仮名遣の知識が入要である」と述べ、入念な準備のもとでイ段工段の甲乙に密接な関係を持つ重紐論から話を進め、最後には甲乙と重紐その他、韻との対応関係などを簡明な形で示す。ところで、万葉仮名甲乙の問題は言うまでもなく各仮名の漢字音のことを抜きにしては語れないが、その中心課題は日本語音の解明にあると言ふべきである。また、重紐のことは漢音・呉音にも関わるものなので、第一章の方でその説明がなされても不思議ではない。これらや、「万葉仮名」と名付ける一章を設定していることなどから、万葉仮名論に対する著者の「意気込み」の並々でないことが感じられる。そして、それは、論が深化して行くに従い強まって行く。

第二節は、万葉仮名にあつて例外的なものの出現に対する解釈を施す。そこでは、万葉仮名使用や上代特殊仮名遣の細部が重紐、上古音、また中国音の時代的变化等々との関連において手際よく述べられている。「意気込み」ももちろん看取される。すなわち、第一節を万葉仮名概観の節とすれば万葉仮名細説とでも言うべきこの節が、日本漢字音の概論書である本書の中に設定されているという事実は、氏の「意気込み」の強さを如実に反映しているものと解され

る。

第三節「解釈」は、まず一、二節を踏まえて上代日本語の音韻と仮名表記との関係について考察を進め、「万葉仮名は、外国資料として、次代(中世)以降の我が字音、並びにその研究史に大いなる参与を致すもの」(一三六頁)という結論に至る。この三節に至り氏の「意気込み」のいわば原動力のありかがよく理解できる。氏は、日本漢字音に関わって、実は上代語音韻論およびそれを踏まえて上代文献資料論を展開しようとしているのである。それが第三節に顕著なのである。一、二節はおのおの内容上一応独立してはいるものの、二章全体から見ればむしろ三節への導入の役を負っている所と言え。跋において氏は、この書が「概論の範囲を逸脱した『論』(日本漢字論の如き域に踏み込むことを、如何としても押さえ難くなつて来た」と、また叙述が日本漢字音の「概説の地盤から専門の分野へと昇華して行った」とも述べる。「万葉仮名」と題するこの第二章は、これまで見て来た所から理解されるように、氏の言う「専門の分野」の「論」と言うべき性格の(強い)所と考えられる。つまり、第二章で高松氏の「意気込み」が強く感じられたのは、そこに「専門分野」の「論」を志向する所があったからであると解釈されるのであり、そしてこの点にまさに本書の大きな特徴、ユニークさが認められるのである。

さて、二章設定の評価などは今後にゆだねることとしても、この章は早々に活発な議論を呼び起こしそうである。ここでは、「論」が積極的に関わっている第三節に焦点を絞って話を進めて行つてみたい。

この章の結論は先に示した。その眼目は、「万葉仮名は外国資料」

という点にある。一口に言えば、氏の論は、浜田敦氏の提唱する記紀万葉「外国資料」説を発展させたものと考えられる。すなわち、ここ十年来とりわけ盛んな上代母音(所謂甲類乙類でのその母音のあり方)についての論争と上代における清濁(所謂濁音仮名の存在)の問題とを踏まえ、また一方では上代の日本語書記者に関する浜田氏その他の意見を参照しつつ、「万葉仮名とは、我が国人の音韻に対する(contrast)ものには非ずして、異国人の耳に従つて(日本語音が)書き分けられたる表音的なるもの」(二九頁)と述べる。これは、早くから後者の問題を中心として浜田氏の主張している「外国資料」論に前者を関連づけることにより、二つのあい異なる問題がいわばより高い次元で一括して取り扱えることを述べるものである。ここに氏の新しい主張がある。もとより、その様な人物のみが携わつていたなどと断言できるわけではないけれども、従前より指摘されているように、上代における日本語書記に帰化人や中国語に通曉した日本人が参加していたことに疑問の余地はない。したがって、上代文献に接しては、高松氏の指摘、そしてそれを含んだ「外国資料論」は常に心にとめておくべきことと考えられる。ただし、上代の文献(万葉仮名)即「外国資料」という大原則に改めて立つと、即座にへそれは例えば第一節第二節に対してどのように関わつて行くのか」といった問題などが生じて来る。日本漢字音資料として万葉仮名を具体的にどう用いることができるのか。万葉仮名の理解にはそれへの知識が必要不可欠とされるころの、上代特殊仮名遣における甲乙の別は、上代語の音韻論的解釈や上代語における母音数の問題(さらには当面の課題ではないが、清濁の音韻論的対立の問題)等)にどの様に関わつていくのか。これらについては、時にその答えの

一部かと思われなくてもない所や、行間に暗示されているかと思われないでもない所など(例えば一三五頁)があることはある。また、氏は、当面の話題でない上代語論への深入りを避けたのかも知れない。が、一、二節での議論や今日(上代における清濁の音韻論的解釈も含め)魅力ある浜田説の位置づけが必ずしも定まっていなかったことを考え合わせてみると、上代語やその資料に関しての、今後における高松氏の一層の言及そして氏も含めた諸氏による活発な意見の交換が予想されもし、また期待されもするのである。

第三章以下は、系統別に日本漢字音を論じる。

漢音を取り上げる第三章では、初めに、日本漢字音における漢音・呉音という呼称の由来を問ひ、前者は日本製の漢語―「準漢語」、後者は中国製のもの―「純漢語」であると指摘する。これは前著書を踏まえての発言であるが、古い時代における日本に対する中国・朝鮮の文化的影響や、中国・日本さらに朝鮮の社会情勢などを考慮しつつ、「漢」そして「呉」や「韓・唐」などの字義用法を追い、呼称としての漢音・呉音の成立事情を論証するその過程は、緻密で読みごたえがある。もちろん、その間においては各呼称と「正音」「和音」など他の呼称との関係も追究しているし、日本および中国における各漢音・呉音という呼称の表す音が、いかなる系統のものなのか、いかなる関係にあるのか、といった問いにもおのずと言及している。漢字音を取り巻く周囲の状況を把握した上で繰り広げられていることでの考察によって、読者は呼称とそれにより表される音の歴史を鳥瞰することができる。

さて、本章第二節から氏はいよいよ音としての日本漢字音の概説

を始める。

第二節は、主として遣唐使派遣時期の検討を通して漢音(の原音)は唐代(初唐)長安音であると論定し、慧琳音・慧琳音義を中心としての唐代音の特徴をあげつらい、それとの対照において漢音の音形すなわち氏という「漢音形」の特色を声母・韻母別に指摘する。

ここでは隋・唐代における中国音の歴史的变化の、漢音における投影がいつも問われているので、読者は漢音の母胎や生い立ちまた他系の音との比較におけるその音的特徴の輪郭を、的確に把握することができる。この節と前節は序に示された氏の基本的な姿勢に基づく考察の典型的な実践例であり、説得力に富む。

第三章は前章第二節を受け、呉音を論じる。漢音の場合と同様に、呉音の成立や特徴を簡明に提示する。漢音との関係については主として依拠した中国音の相違や音的な対応関係などを説いているが、その中でとりわけ私が興味を引かれたのは、各漢字における呉音関与のあり方に対して下した氏の解釈である。

呉音は、実は、現今の漢和辞典の致すが如く、凡ゆる漢字に行き届つていたものではないと考えられる。つまり、そこまで万般を相覆うに至る程には敷衍している道理がない。(二二〇頁)。

呉音は「主たる漢字について、その音を産生し得る漢音とは」「対蹠的なものである」と規定するわけである。示唆される点が多いが、今後私なりによく考えてみたい。

第五章第六章は、唐音について述べる。諸処に「論」を交えつつ、ほぼ先の二章と同様の観点から「中世唐音」および「近世唐音」に筆を進め、約七十頁に渡って唐音の概要を中国「近代漢語」との比

較対照のもとで提示している。唐音は、禪宗以外の場ではさほど用いられて来なかつたため、従来の日本漢字音の概説にあつてはあまり詳しく論じられたことがない。専門的な「論」の展開されている箇所などは、これまで日本漢字音に縁遠かつた読者にはやや難解かと思われるけれども、唐音を詳説するこの二つの章は、唐音研究に興味を持つ人々にとっては今後一つの指針となるであろう。

全体を通読してみると、本書の基調はへ周囲の諸条件を考慮した上で日本漢字音を論じるゝ点にあるということが知られる。もとよりこれは、序で明らかにされている基本的姿勢に基づく論述の、実行の結果にほかならない。この、いわば外堀を埋めてから城を攻める方式の採用により、日本漢字音およびその研究の概貌、さらには時にその具体的な姿が本書においてほどよく「浮彫り」(序における氏の用語)にされている。この点において、氏の本書執筆の根本的な目的は達せられたと言えよう。

正確な調査によつてゐるわけではないが、近年、日本漢字音研究を志す二、三十代の若い研究者が減少気味のように思われる。少なくとも、日本語研究者の増え方に比例して多くなつてゐるなどとは到底言えそうにない。この点に關し、日本漢字音につき初めての本格的な概説書を目指すこの書の出版は、時宜を得たものと考えられる。なぜなら、若い日本漢字音研究者が少ないことの一因は、しかるべき概論書の欠如にあると見られないでもないからである。これは私自身への戒めでもあるが、日本漢字音を理解しまた研究して行くには、言うまでもなく日本語音および中国語音、そしてまた中国語音韻学上の知識をできるだけ深く深く心得ておく必要がある。今

まで述べてきた所から知られるように、中国語音韻学の基礎から説き起こし、各国の文化的状況に心配りをしつつ日本漢字音を要領よく解説する本書は、日本漢字音そしてその研究へのよきいざないとなるに違いない。そして、その際には「論」が、日本漢字音研究のいわば実践例としてこの書をより生き生きとしたものにして行くように思われる。

ところで、本書への要望については既に若干述べたが、何分この書の取り扱う領域は広く論点は多岐にわたつてゐるので、その外にも異論なり要望なりの出されるかと思われる所がないでもない。例えば、第三章で「漢音」使用の状況を伝えるとして挙げられている『扶桑略記』天平七年の記事の信憑性については、山田孝雄氏(国語の中に於ける漢語の研究)宝文館出版昭和四十五年復刷版二二八頁)が疑問を投げかけてゐる。また、日本語音韻史における日本漢字音の位置なり歴史なりについて触れてもらえたらという希望なども、私にはある。

これまであれやこれや私の興味のおもむくままに述べて来た。論旨を正しく理解しないまま私見を述べてゐる所もおそらくあるに相違ない。その点はまさに容赦していただかざるをえないが、つまるところ私は、本書が日本漢字音に興味を持つ人達や日本漢字音研究を志す人達に広く読まれ、そして日本漢字音論が活発になされることを望みたいのである。また、著者にもう一冊この種の書を書いてほしいとも思ふのである。氏の論文に接する機会が多い私の目からすると、概論書だからという理由で、また一方で紙幅の制限もあつてであろう、本書において氏は随分筆を抑えているように見える。その結果、問題の存在に気付きながらあえて一言もそれに触れな

った場合なども、往々にしてあつたのではないかと推察される。氏の活力は本書の内に収まるようなものではない。後字のために続編を書き、さらに日本漢字音のことを論じていただきたい。なお、最後に、個性的な本書のその個性は、例えば本書より四ヶ月ほど前に出版された沼本克明氏著『日本漢字音の歴史』（東京堂出版昭和六十一年）や次の論著などとの読み比べによってよく味わえることを述べ、本稿を終えたい。

○藤堂明保氏『岩波講座日本語8文字』3（岩波書店昭和五十二年）○林
史典氏『日本語の世界4』第五章（中央公論社昭和五十七年）○湯沢『唐
音の研究』第一部（勉誠社昭和六十二年）

（昭和六十一年十月三十一日発行 風間書房刊 A5判 三三〇頁
三八〇〇円）

——筑波大学助教授——

（昭和六十二年七月二十七日 受理）